



話し合いながら、自分たちが作った図が何を物語っているかを考える。「思わず夢中になった」と生徒たち。

被災地の高校生が心に抱えている思いを表に出し、それらを自ら整理していくこと。あの特別な体験を願いに、未来志向の気持ちが高め、学習意欲の向上を図るの狙い。

中心的な役割を果たした小粥幹夫特任教授によれば、企画の発端の一つは岩手県で行われていた県北沿岸地域の共同事業にあったという。岩手県では、県内北部や沿岸地域に、いわゆる進学2番手が点在している。岩手県は、これらの公立高校で共同事業を展開し、互いに新指導のノウハウを持ち寄

り、「チーム岩手」として進学希望者の意識改革や学力向上を多角的に通年で行っている。

しかし、東日本大震災の影響でこの事業が縮小。シンボリックな取り組みの一つだった正月の3泊4日の合同学習合宿は中止となった。同様の取り組みは宮城県でもあり、やはり事業規模が縮小していた。

「そんな話をあちらこちらで聞いて、大学や学会が何かできないかかと思っただけです。先輩と同じ経験ができない今年度の生徒たちに、特別な学習合宿を提供できないか。それで、顔なじみの高校の先生に持ちかけたのです」

小粥特任教授は、東北大学工学部情報知能システム総合学科で、教育広報企画担当として東北の高校にも精力的に足を運んできた人物。多くの高校の進路指導担当者となつながら、本誌4月号を読んで学習合宿の自学自習の精神も理解していた。そして、この自学自習の代わりになるものを7月末のオープンキャンパスで企画し、生徒にその大切さを体験的に確認させようと考えた。その思いは強く、わずか1か月余という異例のスピードで「絆」合宿を開催することを

可能にした原動力となった。

バラバラの思いからメッセージが見えてきた

当日、東北大学のオープンキャンパスの見学を終えてから、各校の生徒たちはキャンパスの一角に集合した。

まず、生徒たちが取り組んだのは、情報整理法の一つで、企業の研修などで使われる「KJ法」を簡略化したグループワーク。参加者がラベルに思いを書いて説明、模造紙に貼り付けて関係を図解していく。小粥特任教授は「支援をするためには、震災を受けた高校生たちの思いを知る必要がある、ラベルに書いて全員参加できる方法を探しました。本音で仲間と話せば、震災で見直されている人の繋がりが「絆」を実感できる。一人できることは限られるけれど、小さなことでも集まれば大きな力となりうることを、競争でなく共創を感じてほしい」と語る。

この催しは、電子情報通信学会の主催だったので、コミュニケーション科学や創造性育成に関する取り組みをしたかったという思いもあつたようだ。このシンポジウ

ムを主催した学会研究会の委員長の原島博東大名誉教授は次のようにつけ加えた。「この震災では安全が問題になりました。人は絶対に安全でないと不安になります。その不安をそのまま出せば悪影響がたくさん出てしまいますので、前向きに不安があることが今大切です。この難しいことを可能にするには、みんなで助け合うこと。そして、後ろ向きの不安を前向きにする。やはり人と人との絆がしっかりしている社会が強いのではないかと思います。この絆こそ災害時の最強の免疫力になります」

生徒は、大学進学への志望学部などによって6人前後のグループを作った後に、自分の気持ちや考えをいくつもラベルに書き出し、「ラベルの語りを聴き」（小粥特任教授）、共通性や関連性を話し合いながら模造紙に書き足していく。



東北大学 小粥幹夫特任教授

被災高校生の進路指導を支援する新しい高大連携「絆」合宿

——東北大学で開かれた1泊2日の討論合宿

特別な体験を学習意欲に高めるチャンスを提供したい——7月28日と29日、東日本大震災の被災高校生を支援するために、「絆」合宿」と名付けられた討論合宿が開かれた。電子情報通信学会を中心に大学関係者が企業の協力を得て起案したイベント。その提案を高校側が受ける形で実現した、新しいタイプの高大連携だった。

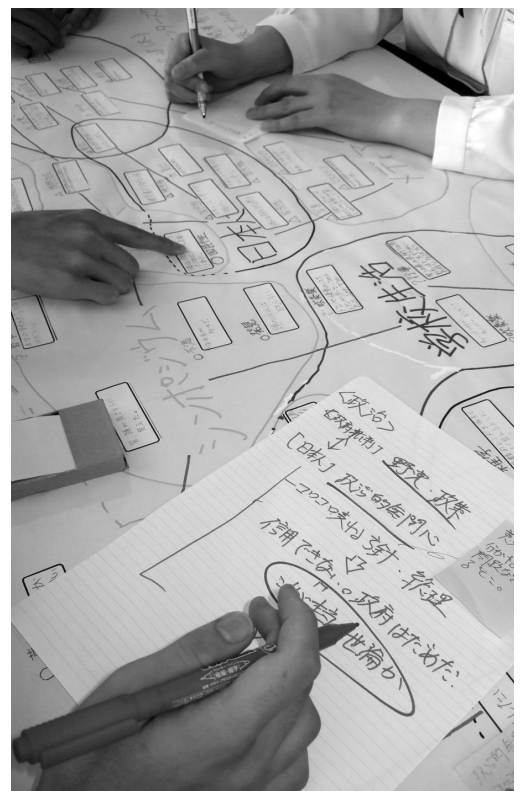
被災高校生への支援を学会が大学と連携し主催

「親友が犠牲になって初めて命のはかなさに気づいた」
「失ったものが戻らないのは分かっているのに、あきらめきれないのはなぜだろうか」
「食べ物がないというつらさは体験した者しかわからない」
「メディアはいつも物事の一面しか伝えない」

「被災地の高校生は、受験勉強において不利だと思う」
「政府がゴタゴタするほど復興がその分だけ遅れる」

その日初めて会った被災地の高校生たちが、ラベルに書き出した自分の思いを大きな紙の上に並べていく。線で結んでいくと、整理のつかなかった気持ちの輪郭が見えてきた。

7月29日、東北大学の青葉山キャンパスに集まったのは、東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県と宮城県の高校生たち111人。岩手県からは福岡高校、久慈高校、宮古高校、釜石高校、大船渡高校、高田高校。宮城県からは気仙沼高校、石巻高校。飛び入り参加した



埼玉県の本庄東高校の生徒たちもいた。東北大学のオープンキャンパスに参加した生徒から希望者を募り、学校の推薦を得て選ばれた生徒が集った。

この1泊2日の学習合宿イベント「被災地高校生を対象とした『絆』討論合宿」を企画したのは、電子情報通信学会の第3種研究会の有志を中心とした東日本大震災被災地高校生支援事業の実行委員会（代表・原島博東大名誉教授）と、東北大学にいる電気・情報や心理学、脳科学に関係した先生からなる「仙台学習意欲シンポ

ジウム」の実行委員会（代表・川島隆太東北大学教授）／幹事・小粥幹夫東北大学特任教授。

主催は、電子情報通信学会の第3種研究会「未来世代から見たコミュニケーション科学の魅力と学習意欲向上」という研究会組織だった。受け入れの準備はすべて学会と大学が行い、費用も企業の協賛などを募って無料。高校側の資金負担は一切なかった。

きっかけは中止になった高校の正月合宿

この企画の目的を一言で言えば、



各グループが壇上に向かって討論の結果を発表。制限時間5分を超えても熱心に説明するチームがほとんどだった。

間に開く外部講師などの講演も、自分で考えることの大切さを伝える内容ばかり。参加する2年生たちは、この合宿が終わると、意識が切り変わり自ら受験体勢に入っていく。7年間やってきて、進学実績の向上にも着実につながっていた。

「震災で関連施設を利用できなくなり、その合宿を中止することは、悔しいことでした。ご支援をいただき今回の学習合宿をやるにあたっては、正月合宿のように自ら考えることを大切に内容にしたかった。ただ、1泊2日しか時間があ

りません。そこで、自学自習よりも、討論形式のほうが良いと考えました。生徒は震災後、自分の考えを、誰かに向かって本気で話しをする機会がなかったはずですから」と語る吉田先生は、「この機会に被災地の高校生が本当は何を感じ、考えているかを、大学の先生方や総務省、内閣府の出席者の方にも知ってほしい、高校生の心を感じてほしいという思いも私の中にはありました」と話していた。

大学の中で高校生たちが県内外の別の高校の生徒たちと出会うだけでなく、高校生たちと大学の先生たちの出会いを作ることも、狙いの一つだった。宮城県の佐藤先生も「高校と大学の接続という点で、出前授業が多いが、それでは人間的な絆ができないんです。今回、学会が動いて大学が協力してキャンパスの一部を提供し、企業の協力で宿泊場所も確保してもらい、絆を作る機会を高校生たちに提供してくれたことは、ありがたかった」と評価していた。

新しい高大連携のモデルになる予感も

生徒たちは、1日目の夕方から

高校生は、人前で自分の思いを表明することには抵抗感を覚えやすいが、この方法は取っ付きやすかったようで、「何でもいいから今気になっていっていることを書き出して！」という指示が出ると、わりとすぐに「何でもいいなら……」という感じで書き始めていた。

ただ、最初は、次のような書き込みも目立った。

「何を書いていいかわからない」

「ホテルでは、だれと一緒に部屋になるのかな」「眠い」

これらの中身については、大学側のスタッフも高校側の引率者も一切口を出さず、「何でもいいから、とにかく書いて」と促すと、だんだんと別の書き込みも増えた。

「電気がないと何もできない」

「震災直後の春休みは何もする気が起きなかった」

「被災者ぶりすぎている人がいる」

「人を助けようとした人が犠牲になるという事態を回避する方法はないだろうか」

「悲しみも苦しみがまんぜずに受け入れて自分の力にすべき」

この討論を指導したのは、KJ法創始者川喜多二郎氏の直弟子である三村修氏（北陸先端科学技術

大学院大学非常勤講師）。どんな思いでも、必ずつながる関係性があり、その関係性が見えれば聞こえてくる思いの向こう側のメッセージがあるという。

「ここに書き出したことだけを素直に見つめるんです。どんなことでもいい。その思いに寄り添えば、やがてメッセージが聞こえてきます。被災した高校生の中には、自分のつらい思いが自分でも理解できず、表に出せないままにいる生徒も多いでしょう。でも、この方法で、他の人と一緒に書いて書き出して、それらのラベルを見ながら話し合うと、自分が何を考えているのかも見えてくるんです」

久慈高校の3年生の一人は、「このイベントが始まるまでは、正直、楽しみではなかったけれど、やり始めると本気になった。最初は、みんな、意見や考えがバラバラ。でも、話し合いながらつながっていくと、一つの意見のようなものがまとまってきて、おもしろかった。政治家たちも自分の意見ばかりに固執しないで、こんな風に討論すれば、違いを乗り越えて意見をまとめられるのではないかと思いました」。この学習合宿の実現

に尽力した一人、宮城県の気仙沼高校の佐藤忠司進路指導部部長は、「まだまだ、あの被災地での体験や思いを語れない生徒がたくさんいるが、今回初めて自分の思いを人前で言えたり書けたりした生徒もいたと思う。この合宿が彼らの心の中で何か変わるきっかけになれば」と語っていた。

高校生の気持ちや大学の先生に伝える

岩手県の宮古高校の吉田達行進路指導主事は、宮城県の佐藤先生と一緒に当イベントを高校側で取りまとめた中心人物。今回、大学側から企画の提案を受けたとき、大学や学会の宣伝色が強く出るとを懸念したという。

大学側との会合で吉田先生たちがその点を指摘すると、仙台学習意欲シンポジウム実行委員会の川島代表から「絶対にそのような企画にはしない。被災した高校生のための企画である」という確約を受けた。ここから、企画の実現化の流れが一気に加速したという。

川島代表は、いわゆる「脳トレ」ブームを生んだ脳科学者。今回の被災高校生たちの学習意欲を高め

と2日目の早朝からの討論を重ねていった。そして、2日目の10時30分から発表。それぞれの思いを深めて感じたことを関連付けたメッセージをグループごとに発表した。

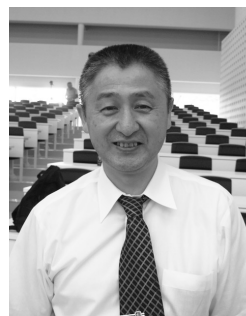
あるグループの生徒たちは、復興のあり方を次のように語った。

「みんなが書いたことについて話し合っていくと、震災に関わることと、日常にかかわることに分けられることに気づきました。さらに、両方とも人の気持ちを大切にしなければならぬという共通点があることも気づき、そこから、コミュニケーションが何よりも大切だと分かって、今後の復興像も見えてきました。つまり、人の気持ちや大切にした「コミュニケーションのある街づくりこそが重要だということ」です」

発表を終えた宮古高校の生徒の一人は「大学は、できれば行きたいというぐらいいところだったけれど、この合宿に参加して、もっと積極的な気持ちで大学に入りたいと思うようになった」と語っていた。多くの生徒が、何らかの刺激を受けて、進学への意欲を高めていたようだ。主催団体の原島代表は、「今回の取り組みで高校生に

る学習合宿に全面協力し、吉田先生や佐藤先生たちに何度も「参加した高校生にとって一生残るようなものをとお土産にして持ち帰らせたい」と語っていたという。イベント2日目の講演会でも、壇上上がった川島代表は生徒たちに朝食と学力の関係を楽しみ語り、生徒たちを大笑いさせながら「一緒に研究をしよう」と訴えていた。

吉田先生たちは、今回の「絆」合宿で、普段の高校ではしていない取り組みをやりたいと考えたといい。そもそもこの企画のきっかけになった岩手県北沿岸合同事業として正月に行われてきた合宿が、4日間の自学自習を通じた学習意欲の向上、習慣の定着支援という、普段の学校にはない取り組みが最大の特徴だったからだ。受験テクニックを教えることは一切せず、朝から晩まで自学自習。自習の合



宮城県 気仙沼高校 佐藤忠司進路指導部部長



岩手県 宮古高校 吉田達行進路指導主事

一番感じてほしかったのは、『私は一人じゃない、同じことを考えている同年代の高校生がたくさんいるんだ』ということでした。わずかに1泊2日の交流でしたが、一緒に話し合い、一緒に考え、一緒に作業する体験を通して、何か得るものがあってくれたらと願っています」と語っていた。

さまざまな大学関係者と高校関係者の思いが一つになって生まれた被災高校生への支援。オープンキャンパスの参加、仲間との絆合宿、シンポジウムの講演聴講を通して、参加した生徒に何かを与えられたように見えた。この支援は、高校生の学習意欲を高めるだけでなく、学会が高校生を理解しようという、実は今まであまりなかった目的も有した。出前授業とは違う、新しい連携のモデルにもなりそうな予感が会場に広がっていた。